

『門』小論

——宗助に見る他者性の揺れ——

林 京 華*

1. はじめに

明治四十三年三月から六月まで「朝日新聞」に連載されていた『門』は、それまでの漱石の作品と題材の設定が異なっている。そこには、不義で社会から追放され、また社会との交流を自ら最小限に抑えようとしている主人公が描かれている。このように、社会から疎外され、また社会を拒否する態度で孤立状態に陥っている主人公の設定は、以前の作品には見られなかった。

「社会の存在を殆ど認めてるな」(十四) といった宗助の「局外者」である設定について、越智治雄氏は、「宗助にとっての他者は、御米を除けば、まず小六と坂井である¹⁾」と指摘したが、「いずれにしても宗助の意識においては自身の影に等しい存在だとし、他者としての坂井と小六の宗助との関連性を述べた。また、畑有三氏²⁾は、「象徴性」を『門』の基本的な構造として提起し、「相対化」を『門』を読む際の有効な方法と見なしている。更に宗助と御米の家という空間の「内/外」を象徴として読み、「社交嫌い」な宗助と「世間の広」い坂井のやり取りを例として「内/外」の関係性を説明している。その後は大抵が『門』の空間描写の「象徴性」を掘り下げる論説である。更には、前田愛氏が都市空間を分析することによって他者性と自我同一性の対立を見出し、坂井と宗助の対照性と「宗助と御米の小さな世界に「他者」として割り込んでく³⁾」る小六の存在について述

べている。

以上挙げたように、「他者と自己」、「自己と社会」のような対立を挙げた研究は少なくない。しかし、その間に起こるコミュニケーションと、コミュニケーションによって宗助にどんな影響を及ぼしたのかについての研究は比較的少ない。したがって、本稿は先に挙げた説を踏まえて、自己と対立する関係としての他者に注目し、主人公宗助の他者への意識とそれを通しての自己省察の変化について考察していきたい。

2. 社会に棄てられた夫婦

自己は他者とのコミュニケーションを通じて生み出される。我々が他者を意識するのは他者が自分にとって理解可能な存在として現れた瞬間ではなく、逆に相手とのコミュニケーションが難しくなった際である。そのような『門』における他者に関わる描写を見てみると、まず読者の目を引きつけるのは、社会という言葉であろう。

二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれども其他には一般の社会に待つ所の極めて少ない人間であつた。彼等は、日常の必需品を供給する以上の意味に於て、社会の存在を殆んど認めてるなかつた。彼等につつて絶対に必要なものは御互丈で、其御互丈が、彼らにはまた充分であつた。(十四) (下線部は筆者によって引いた)

二人は社会の経済的な需要、若しくは日用品の供給以外、人間が集まって生活を営む社会での人

* 国立台湾大学大学院院生

間関係について漠然としたような態度を取っている。夫婦は東京という都市に戻ったが、同じく東京に住んでいる叔父とはあまり関わり合っていない。また弟と朝夕一緒に生活していたのが弟の十二歳の頃までであったため、兄弟二人はお互いに親しみを抱いているとは言えない。このような東京は宗助にとって無論出身地としては故郷とは言えるが、実は心を打ち明ける友や互いに理解し合っている家族など一人もいないよそよそしい所だというのも過言ではないであろう。従って、宗助は御米と共に築いた小さな家族に依り付けるに他ならない。

宗助夫婦は、二人の愛を求めることで義理を守ることができなくなった。世間で共通されている規範、即ち社会が順調に機能するために、多数人の合意で成り立った道徳・義理を違反した場合は社会に追放される。宗助は御米と愛情関係・婚姻関係を築く時点で、婚姻関係以外の人間関係を維持することが難しくなった。そのため宗助が失った家族との繋がり、間接的にその経済状況に影響を及ぼした。宗助がその後父親の経済的な支えを得られず、金銭と苦闘する生活に疲れた日々を送るようになった。

ここで、宗助の親戚と交流する場面を一つ取り上げてみよう。叔父が何の知らせや説明もせず宗助の実家を売却する時に、不満を感じた宗助は手紙を出したが、向うが面会すると提議したことを、御米に相談してみると、「でも、行けないんだから、仕方がないわね」という細君の答えで、宗助は始めて「細君から宣告を受けた人の様」に、自分の「抜ける事の出来ない様な位地と事情の下に束縛されてい」（四）ることに気付いて諦めたのである。不満を感じた時点ですぐ叔父に手紙を書くという素振り、小六に頼まれて叔母に手紙を書くことさえもできなかった、消極的な宗助とはまるで別人のように見える。それは親戚との不愉快なコミュニケーションの経験に所以していると理解できる。

このように社会との絆が期待できない宗助は、経済的・人情的な危機に瀕し、またそれらの危機が、家族のたわいのなさを認識させられたほか、間接的に性格にまで影響されたとも言えよう。

3. 「影」としての他者

宗助と御米夫婦の相互依存関係は明らかである。義理に背いた二人の愛情の共同意識のもとで、宗助は常に御米を自分と同質的な存在だと意識している。

広い世の中で、自分達の坐つてゐる所だけが明るく思はれた。さうして此明るい灯影に、宗助は御米丈を、御米は宗助丈を意識して、洋灯の力の届かない暗い社会は忘れてゐた。彼等は毎晩かう暮らして行く裡に、自分達の生命を見出しつゝたのである。（五）

宗助夫婦は社会を暗く捉え、なるべくそれとの交流を避けようとしていたが、それはやはり不可能なことであろう。まるでこの事実を証明するかのように、このお互いだけで十分だと考えていた宗助夫婦は、小六を受け取らずにはいけなくなった。さらに、盗まれた坂井の文庫が、不思議と言えるほど宗助と御米の家に落とされていたという事件で、宗助の人間関係が夫婦二人だけではおさまらなくなった。

本節では、社会という枠に於いての宗助夫婦の人間関係、宗助の「影」と言われている他者——即ち、小六と坂井⁴——と宗助との交わりを分析する。両者の交流が宗助にどのような意識の変化をもたらしたかについて考察していく。

3.1 過去の「影」：小六

宗助は「弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動してゐる様な気がしてならなかつた」（四）と苦々しく思い、「心のうちに、当時の自分が一閃に振舞つた苦い記憶を、出来るだけ屢々呼び起させるために、とくに天が小六を自分の眼の前に据ゑ付けるのではなからう

かと思つ」(四) たのである。同じ家庭に生まれた、若い自分と相似する性格を持つ兄弟ということで、宗助は小六との根源的な同質性を認めていると言えよう。

しかし、友人の安井を裏切った宗助とその「共犯者」の御米がこのような不義を働いたため、友人と家族、即ち一般に頻繁な交流を交わすべきである対象との緊密な関係を維持することができなくなった。小六の姿が自分の戻りたい学生時代の姿のように宗助の目には映っているが、一方では義理に背いてから関係を維持しにくくなる実家の弟でもある。

小六について、越智治雄氏⁵は小六を宗助の「影」に等しい他者として扱った。越智氏の説は、小六を若い・過去の宗助として理解してもよいと思われるが、ただ「影」と言っても、小六は他者であることは注意しなければならないという考えである。また、前田愛氏⁶は、小六を宗助夫婦の暗い過去を帯びる「不意の闖入者」と定義し、その影響が主に小六と頻繁な交流を交わす御米に見えると指摘した。そのような前田氏の指摘は、宗助にも適用すると考えられる。ただ、小六が若い・過去の宗助に似ている点を考えてみれば、小六の宗助への影響は、単純に暗い過去を帯びる「不意の闖入者」に限らないと考えたい。小六を見て「昔の自分を苦々しく思」(四) う理由を考えると、宗助は小六を通して、過去の楽天家の自分を思い出して現在の「失敗者」(四) としての自分と照らし合わせるのであろう。

宗助が小六と交流する場面を考えてみると、宗助は兄として小六に将来について注意を与えたことはなかった。それに、時々小六が家にいるということさえ忘れてしまったことがあり、小六が酒を飲んで遅く家に帰ってきた時に、小六に酒を止めさせようという御米の忠告を聞いても、その弟と話す意欲は全くなかった。これらの場面から宗助の小六とのコミュニケーションをためらう様子がうかがえる。

『門』の冒頭で、宗助が「近」という字の書き方を御米に尋ねた。赤井恵子氏⁷が既に指摘しているように、それは宗助の「停滞する自己」という「現状」に対する疑いと考えられる。宗助は小六を過去の自分に重ね合わせて、自分の過去・現在・将来を考えて、人生は一気に転落していくと自分の将来を予見した。また、小六の学資問題も、改めて宗助に過去の過ちがもたらした経済面の不足を認識させ、更に絶望に陥っている自分の境地を考えさせたのである。小六は宗助にとっては、根源的な同質性があるが、やはり宗助を批判する社会に属する他者であろう。

3.2 崖上の「西洋人」：坂井

畑有三氏⁸は、御米に「世間の広い方」と言われて「外」の象徴とされている坂井が宗助を自分の「洞窟」に呼ぶことと、社交嫌いの宗助が坂井だけには「用もないのにこの方だけわざわざ出掛け」ることなどを挙げ、「内」とそれに相対する「外」を設けて、それぞれ互いに他の一方を求めずにいられないという関係と見出した。

ここで注目したいのは、この世間の広い坂井に対して、宗助は最初から親しみを持っていただけではなかったことである。文庫が盗まれた事件までは、宗助は坂井との交流が少なかったため、「崖の上に西洋人が住んでいると同様で、隣人としての親みは、まるで存在していなかつ」(九) と語られている。西洋人というと、やはり宗助にとって一定した異質性を持つ、他者であろう。

その時、宗助の目に映った坂井は、ただ気前のよい家主に過ぎなかった。ところが、坂井の盗まれた文庫が宗助の家に落ちていたり、宗助の売りに出した屏風が、坂井の家に現れたりと思議な縁で二人は親しくなった。文庫を返す際に宗助はやっと交流する機会を得て、その時点から坂井は「大変談話の材料に富ん」で、「世間の広」い人だと、少し親しみが感じられるようになったが、「単に隣人の交際とか情誼とか云ふ点から見ても、夫婦はこれよりも前進する勇気を有たなかつ」(九)

たと、慎んだ態度で世間の人と交流する夫婦の様子がうかがえる。

その一方、屏風は宗助の父親が遺したものである。この父親が遺したものを質屋に入れようとするのは、貧窮な生活を余儀なくされたからである。宗助が自分の窮屈な「失敗者」の一面を坂井に打ち明けることは、宗助が自分の閉鎖的な世界を、坂井にうち開けはじめようとしていると見なすことができるのであろう。

二人の交際が更に深まっていく頃には、宗助は坂井の「時々は歡樂の飽滿に疲労して、書齋のなかで精神を休める必要が起る」気持ちを十分理解できるようになってきた。一方、坂井も「平凡な宗助の言葉のなかから、一種異彩のある過去を覗く様な素振を見せ」（十六）た。二人は、頻繁な交流で、互いに心を打ち明けられるような存在にまで変わった。

坂井との交際は宗助に自ら捨てた「昂い首を世間に擡げつゝ、行こうと思ふ辺を濶歩し」（十四）た「過去の宗助」を喚起させ、友達を裏切らなかつた宗助の「現在」を具現化し、有り得たかも知れない人生を夢想させた。このように、坂井は「西洋人」のような異質な存在から宗助を最も理解し得る一人に転じていった。

一歩進んで考えてみれば、坂井が「外」——もっと広げて言えば宗助がコミュニケーションを拒否していた社会——から宗助の「内／外」の「壁」を超えて「内」に入ってきた象徴だと読み取っても良いであろう。宗助は、元々他者だと見ていた坂井を通して、過去と現在の「自己」を解剖してきたのである。

4. 「自・他未分」世界の裂け目：宗助の他者から自我へ

前節では、「失敗者」としての自己認識を宗助に改めて示した小六と、「西洋人」のような異質な存在から宗助のよき理解者に転じた坂井につ

いて論じた。宗助はそれらの他者を通して繰り返して自分という存在を確認したが、彼の御米との「自・他未分」の認識は容易に動揺できなかった。

宗助と御米は、自分たちを切り離す事のできない一体と考えていた。それを二人は社会に認められた行動規範を破って結婚することを決めた時点においては既に認知しており、またその後の苦しくて寂しい月日を経るときも、「自己を幸福と評価する事だけは忘れなかつ」（十四）たのである。

互いに精神の依拠としていた宗助と御米は、夫婦は苦しみと楽しみをともに分かち合い、どのような出来事であっても二人で十分に話し合ってから一緒に決める。殆どの出来事について、互いに考えていることを伝え、理解を得て認識を共有するといった良いコミュニケーションを取っていた。ただ例外は、易者の宣告と安井の上京、この二つの出来事のみである。

4.1 御米の「自白」

御米が夫に隠していた秘密は、易者からの子供に関わる宣告である。まず御米の「自白」を触発する場面を見てみよう。

（夫婦は坂井家の陽気で賑やかな模様について話していた）宗助は其時突然語調を更へて、「何金があるばかりぢやない。一つは子供が多いからさ。子供さへあれば、大抵貧乏な家でも陽気になるものだ」と御米を覚した。其云ひ方が、自分達の淋しい生涯を、多少自ら窘める様な苦い調子を、御米の耳に伝へたので、御米は覺えず膝の上の反物から手を放して夫の顔を見た。（十三）

『門』の中で、「淋しい」という言葉はおよそ八回出現するが、その原因と意味は多岐である。夫婦が淋しく感じるのは、社会との交流不能から生じた淋しみや、繰り返す日常生活がもたらした倦怠・空虚等のときである。ここで取り上げたのは、宗助が子供をたくさん持っている、陽気な坂井家を羨んで、自分の淋しみは子供の不在によるのだと帰結した場面である。

宗助の言説に触発され、後に御米が易者から聞いた、人に対して済まない事をしたことがあるので子供ができないと言われたことを隠していたのを宗助に「自白」してしまったが、宗助は「馬鹿気ている」とわざと鷹揚な答えをして御米との打ち明け話を回避した。ここで御米が言おうとする「済まない事」は、子供を三度亡くした母親としての自分への呵責、または夫婦が犯した道義上の過ち、との二通りの読み方があるが、ここでは明かに認識の違いが生じている。

宗助は自分の淋しみを意識してはいたが、この淋しみは、子供がないことに由縁したというよりも、過去の過ちが自分にもたらした社会との交流不可能から生じたものだと読み取れる。「外」に向って生長する余地を見出し得なかった二人は、内に向って深く延び始め（十四）、御米と共有している世界の「外」へ発展し得ぬため、宗助は「陽気」な子供は「陰湿」な家を「外」の賑やかな町のように賑やかな世界に変えることができると望んでいるからである。日曜に賑やかな町へ出かけ、繁華な都市雰囲気を感じ、面白い道具を買って帰る、現在の宗助は家父長としての責任で性格が一変したが、人との付き合いを好む過去の性格は、やはりかすかすに見える。

子供を無事に生み、育てられない自分を責める御米は、宗助の過去に対する執着を意識せず、また共有し得なかった。宗助も、自分を見つめる機会を逃した。作者はこの場面を通して「自・他未分」の宗助夫婦の世界の裂け目を見せようと巧みに仕組んでいると言うしかない。

4.2 安井の上京

安井が東京へやって来るという消息を知る前までは、宗助と御米の共通認識では、御互いに寄り添えば、寄り添うほど「暗い社会」に抵抗することができるようになって考えていた。

彼らの信仰は、神を得なかつたため、仏に逢わなかつたため、互を目標として働らいた。
(十七)

しかし、安井の上京を聞いて、坂井家から帰ったその晩、宗助は御米に「信仰の心が起った事があるかい」（十六）と聞いた。安井の上京を知った後の二日間、宗助は御米と相談して不安を分かち合おうとするかわりに、それまで考えていなかった宗教のことを考えていた。宗教について悩んで眠れなくなった宗助が「何をかしてもつと鷹揚に生きて行く分別をしなければならないと云ふ決心」をして目覚めたあの朝、「冴えた日は黒い世の中を疾く何処かへ追ひ遣つてゐる」（十七）た。御米と共有する洋灯の力が届かない「暗い世」は、朝日の力で追いやられた。安井の上京で、宗助は御米と寄り合って成り立った自己という認識への疑いが浮上した。またそれで、宗助が宗教を通して、絶対的な基準を求め、意識的に御米との「自・他未分」の世界を離れ、精神的な自立を求めようとしたこともうかがえる。

5. 結び

本稿は、『門』を主人公が道義上の欠陥で、一つの排他的な世界を造り出して、道義を合意で成立させた人々に背を向けた物語として読み、自己と対立する関係としての他者に注目し、主人公宗助の他者への意識を通しての自己省察の変化について考察してきた。

宗助と小六、坂井との交流によって、宗助の自己への認識を再確認することができた。そして、宗助と最初から自己との同質性を認める御米とのコミュニケーションから「自・他未分」の宗助夫婦の世界の裂け目を見出した。その中で、「自己・他者性」のコミュニケーションは避けることができないことがうかがえる。また両者はコミュニケーションの進行によって動揺することも見出される。

本稿では、『門』の主人公宗助を中心に、他者と自我のコミュニケーションについて考察を行ってきたが、自我の成立に関する問題についてはさ

らに深く考察する必要がある故に、今後の課題としたい。

注

- 1 越智治雄（1967）「門」『夏目漱石作品論集成 第七卷 門』おうふう、P.48
- 2 畑有三（1969）「門」『国文学解釈と教材の研究』14（5）学灯社、P.86
- 3 前田愛（1982）「漱石と山の手空間—『門』を中心に—」『講座夏目漱石第四卷〈漱石の時代と社会〉』有斐閣、P.140
- 4 越智治雄（1967）前掲書、P.48
- 5 同上
- 6 前田愛（1982）前掲書、P.140
- 7 赤井恵子（1983）「『門』論 序説」『夏目漱石作品論集成 第七卷 門』おうふう、P.203
- 8 畑有三（1969）前掲書、P.87

テキスト

本文の引用は『漱石全集 第九卷 門』（1956年、岩波書店）による。

参考文献

- 越智治雄（1967）「門」『夏目漱石作品論集成 第七卷 門』おうふう
- 畑有三（1969）「門」『国文学解釈と教材の研究』14（5）学灯社
- 前田愛（1982）「漱石と山の手空間—『門』を中心に—」『講座夏目漱石第四卷〈漱石の時代と社会〉』有斐閣
- 赤井恵子（1983）「『門』論 序説」『夏目漱石作品論集成 第七卷 門』おうふう